

雑誌「療養生活」と田邊一雄

日本女子体育大学特任教授

結核予防会アーカイブ委員 青木 純一

結核研究所にはかつての結核の惨状を伝える貴重な図書・雑誌・ポスター・映画・絵葉書など数々ある。その中に療養する患者の情報誌として稀有な役割を果たした雑誌がある。雑誌名を「療養生活」といい、いまから100年前、関東大震災の半年前にあたる1923（大正12）年3月に創刊、1965（昭和40）年の最終号（495号）まで40年以上にわたり広く療養者や回復者に愛読された。「療養生活」の発行元は神奈川県小田原市にあった自然療養社、社主がのちに「療養の慈父」と慕われた田邊一雄である。結核研究所が所蔵する「療養生活」（全巻）は、2011年に田邊氏のご長女、敏子様のご寄贈による（図1）。

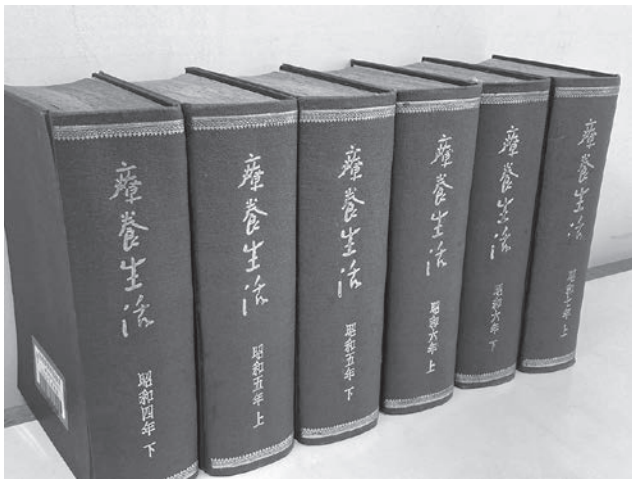


図1. 昭和初期の「療養生活」（結核研究所所蔵）

療養者のための雑誌づくり

結核が治る病気になるまで、患者は新鮮な空気のもとに静臥し、栄養のある食事をとる、いわゆる大気・安静・栄養を基本とする自然療法が中心であった。患者はそのために療養方法を学び、お互いの療養にかかわる悩みや不安を相談し、ときに患者同士が交流することも必要になる。それが「療養生活」が果たした大きな役割であるが、若干32歳の田邊が「療養生活」を刊行した経緯から振り返ってみたい。

1891（明治24）年、横浜市に生まれた田邊一雄は、1916（大正5）年に早稲田大学理工学科を卒業、現在

の箱根登山鉄道の前身となる小田原電気鉄道会社に就職した。田邊が過労から結核を発病したのが、それから3年後の1919（大正8）年3月、翌年には咯血を繰り返す、家族も諦めざるを得ないような病状であった。重い病に伏す田邊が藁をも掴むような思いで学び取った療養書が原栄「肺病予防療養教則」である。1912（明治45）年初刊の本書は1941（昭和16）年まで59版を重ねる、日本で初めて自然療法を体系的にまとめた名著である。

幸いにも田邊は回復へと向かう。この療養体験をきっかけに田邊は「結核の正しい療法を広く世に知らせたい」と願うとともに、療養者や回復者が交流し、療養上の様々な情報を交換することの大切さを痛感した。「療養生活」創刊に寄せる田邊の思いが、次の一節からわかる（図2）。

病者は寂しいものである、まして肺患者の精神苦、寂寞さは、同病者でなくてはわからぬ。健康者の十回の見舞状よりも一通の同病者の見舞状の方が、ど



図2. ありし日の田邊一雄

のくらい力強く嬉しいか。実に、病むものの友は、やはり病むものでなければならぬ。この意味において、自分は年来こうした同病相憐の機関が欲しいと思っていた。(中略) ここにおいて自分は貧弱ではあるが、この小冊子「療養生活」の全誌を挙げて同病諸氏の壇上にあて、病者交歓、主張、文芸はもちろん、偽りなき経験談などを発表したいと思うのである。(田邊一雄「創刊に際して」「療養生活」第1号、1923年)

「療養生活」42年の足跡

田邊が出版元となる自然療養社を創業したのが1923(大正12)年10月、その半年前の3月に第1号500部を世に送り出した。創刊号はかりにも豪華とは言えず、B6判で全8頁、1部5銭であった。豆腐一丁が5、6銭の時代である。しかし、「療養生活」はたちまち読者の関心を集め、同じ年の12月号(第2巻2号)はA5判にサイズを拡大、頁数も28頁となる。その後も「療養生活」は順調に紙面を拡大し、1930(昭和5)年に100頁を超え、1937(昭和12)年～1939(昭和14)年は毎月130頁を要する充実ぶりであった。しかしながらこの頃がピークで、その後は戦時下の品不足によってやむを得ず頁数を減らし、終戦直前の1944(昭和19)年はわずかに全30頁となる。国策として各種雑誌の整理統合が行われる中、「療養生活」はこれまでの実績から休刊を免れた数少ない雑誌でもあった。

戦後の混乱がやや落ち着く1951(昭和26)年には「療養生活」の紙面は70頁程度まで回復した。だが、結核治療の変化もあって、その後ふたたび戦前のような勢いを取り戻すことはなかった。それから15年を経た1965(昭和40)年1月、田邊一雄の死によってその役割を終えたのである。

雑誌の内容やその特徴

雑誌「療養生活」はどんな内容で構成されたかを簡単に紹介したい。まずは本誌の特徴である療養者や回復者の体験欄、読者の質問に顧問医が回答する「療養質疑応答」欄(戦後は「質問ノート」・「療養相談」・「生活相談」欄)、療養俳壇・療養歌壇・療養詩壇・療養柳壇のような読者の作品をまとめた文芸欄、読者に一部誌面を開放し、相互の交流を意図してつくられた「まどい」欄がある。このほか定期的に「研究報告」や「特集」を組んで、読者の疑問や関心に応えていた。

「療養」とはからだを休めて健康の回復を図ること

だが、刊行当初は「肺病に薬は無効」と謳う「療養生活」に批判的な専門医も多く、雑誌に寄稿する医者はいない。著名人による最初の投稿は茂野吉之助であった。当時、古川鉦業に勤める茂野は1922年に新潮社から「肺病に直面して」を上梓し人々の注目を集めた。「療養生活」第1巻第3号から「肺病の療養上の安静と運動の意義」を連載する自然療法のよき理解者である。それから2～3年を経て「療養生活」に対する誤解も少しずつ和らぐ。相談活動を中心に、額田豊(額田保養院)、鳥潟豊(鳥潟保養院)、中村春次郎(恵楓園医院)、正木俊二(富士見高原療養所)、石田誠(富田浜病院)といった結核の専門医が寄稿した。

戦後になって胸郭形成術や人工気腹療法といった外科的療法や、ストレプトマイシンやヒドラジッドのような化学療法の登場によって「療養生活」の誌面も変わる。専門医による新たな治療法の解説や回復者の予後を中心とする情報が増えた(図3)。また、近藤宏二

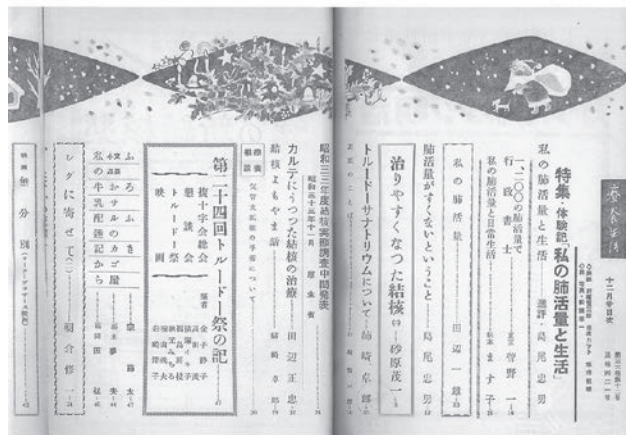


図3. 「療養生活」の目次(昭和33年12月号)

(NHKラジオドクター)、砂原茂一(国立療養所東京病院)、島村喜久治(国立療養所清瀬病院)、暉峻義等(労働科学研究所)、岡西順二郎(都立府中病院)など、著名な専門医もしばしば寄稿した。併せて、岡治道、隈部英雄、岩崎龍郎、鳥尾忠男、姉崎卓郎といった結核予防会関係者の名前も頻りに登場する。「療養生活」の詳しい内容についてはあらためて報告したいと思うが、最後に、雑誌「療養生活」の特徴をまとめて了とする。それは第一に、患者や回復者のための情報誌であったこと、第二に、自然療法の啓蒙・啓発に努めたこと、第三に、これら2つの特徴を、40年を超える長きにわたり守り続けたこと、である。☺